

# 予想外の大学教師

藤井加代子

## やってきた二冊の本

不思議な偶然に驚くことが時々ある。誰かが仕組んだのかと思うような偶然だ。昨年のこと、新年を迎えて、あと一年で定年退職することを意識した。どうしたものかと考えていると、そんな不思議な偶然が起きた。まるで私のために書かれたような本が二冊、前後して手に入ったのだ。もちろん自分でいつものようにアマゾンで注文したのであるが、偶然にも、二人の退職した大学教師の本であった。一冊は、アメリカのジョン・ウィリアムズというデンバー大学の教師が五十年前に出版し、今またヨーロッパを中心に注目されているという小説『ストーナー』(Stoner: A Novel)と、もう一冊はイギリスのオックスフォード大学の名誉教授、ジョン・ケアリーの『予想外の大学教授』(The Unexpected Professor: An Oxford Life in Books)である。フィクションとノンフィクションの違いはあるが、二冊とも大学教師の退職までの人生を描いている。一人はアメリカの州立大学の、もう一人はイギリスの名門大学の教師である。

## 本を読む人

この二冊の本は、一年後に迫った退職を考える私に、天からの授かり物に思えた。『ストーナー』を先に手にとり冒頭の一節を読み出すと、最後までページを繰る手が止まらなくなった。吸い込まれるようにして、ウィリアム・ストーナーの人生を読んだ。アメリカ中西部の田舎に住む

貧しい農家の一人息子が、役場の職員の間言を受けた父親の勧めで、ミズーリ大学に進学することになる。苦勞して学費を工面した父母は、息子が卒業後は故郷へ戻り、彼らに代わって農業に就くことを望んでいる。彼自身もそれ以外に何の目標もなく、代替わりをして一生土塊を耕し生計を立て、いずれ土塊に戻るような侘しい暮らしを疑うこともない。Stoner という姓まで、土に縛り付けられた人生を暗示する。家族三人は「石」のように寡黙で、語り合うこともない。そんな一家の生活の隅々々で染み渡る悲しみは、小説全体の基調となり読者にもひしひしと伝わってくる。そこには、富と名声へのアメリカの夢の片鱗もない。そんな青年が、本人も予想だにできなかった大学教師、しかも文学の教師になる物語である。

物語は、ストーナーの死亡記事のような略歴の紹介から始まる。その略歴には、死者の生涯を彩る功績は何も記されていない。アメリカの地方大学に入学し、大学院に進学して博士号を取得し、母校で教職につき、四十年近くそこで教鞭をとり、死によって職を辞すことになる。准教授で終わった。彼が教えた学生はもとより、誰にも大した印象を残すことはなかった、とそつげなく彼の人生は締めくくられる。死者への饒言葉は一言もそこにはない。それにもかかわらず、その後続く彼の人生の展開から、目が離せなくなるのである。

青年は言われるままに、親の借金で大学に進学する。大学近くに住む親類の農作業と豚の世話を手伝う代わりに間借りさせてもらい、土壌学など卒業後に父母の農作業を助けるべく学ぶ。化学の基礎を暗記する単調な勉強の日々のなかで、教養必修科目としてイギリス文学の授業を受

け、人生で初めて文学と出会う。このイギリス文学概説の授業で、彼は新しい世界に参入することになるのである。文学の担当教師が朴訥なストーナーの人生を、大きく変えるきっかけとなる。その教師にシェークスピアのあるソネットの意味を問われて、クラス全体が沈黙するとき、その詩が彼の内面に新しい体験を引き起こす瞬間が感動的だ。教室の窓から斜めに射しこむ光に満ちた静寂のなか、農作業で日焼けした手の指に流れる血潮を初めて意識するストーナーは、文学を介して過去の世界と今を生きる自分が結ばれるのを感じる。青年となり、孤独と自意識を初めて感じ出した丁度そのとき、授業で読んだトリスタンとイゾルデやパオロとフランチェスカの息づく世界の存在を、違和感なく受け入れる。文学のなかの人々は過去を形作り、現在の瞬間の断片に生きる彼の孤独を慰謝するものとなった。彼の文学科目への傾斜が、文学への愛によることを教師に指摘されるまで、当の本人は自分の変化に気づかない有様だった。

土壌学に興味を失っていくのは、必然であった。卒業後の帰郷を待ちわびる両親の期待に背くことになる。大学院を終えて、幸運にも教員になり、恋におちた女性と結婚したが、家庭生活は不幸なものとなった。公私にわたる様々な困難にもかかわらず、彼は黙々と読み、大学で学び教え続け、恬淡としてストイックな生き方を貫く。しかしながら、ストーナーからは確かに彼らしさが伝わってくる。それは文学に信を置き、真摯に学び教えるという一貫した日常生活がもたらすものだと思う。予期せず就くことになった大学教師の仕事は、彼の生活習慣の結果であり、その習慣が彼自身であった。退職を二年延長することを望みながらも、病を得て読書中に事切れた。教授にはなれず終ったが、元より地位や権威への執着はなかった。ストーナーは「読む人」であり、この大学教師の物語は、読む人のための物語である。

## 本を読んで語る人

アメリカの地方大学の文学教師ストーナーの物語を読んだ後、二冊目の『予想外の大学教授』を読んだ。著者のジョン・ケアリーは現在八十一歳で、オックスフォード大学のマートン・コレッジのイギリス文学の

教授であった。この著書の内容は、彼自身により序文で端的に説明されている。友人にイギリス文学史の執筆を勧められるが、ネットで容易に関連情報を入力できる現状を考慮し、個人的なイギリス文学と彼の関係、出会いと、その後の展開を書くことにしたと語る。イギリス文学の簡略な紹介としても読めると述べているが、「選り好みの独断的介绍だけでなく」との断り書きにこの本の特徴がよく表れている。この序文に示されるように、彼の専門とするイギリスの詩人の作品をはじめとして、広汎な興味に沿って彼が読んだイギリスやヨーロッパの小説や、イギリス人が特に愛好する伝記や回想録など、多彩な書物が紹介されている。それらの書物は彼の人生と緊密に結びつき、著作全体が彼自身の大学教師としての回想録となっている。

ストーナーは読む人であるが、読んだ本を語ることはない。ケアリーは本を読む人であると同時に、本について語る人である。読み進むうちに、オックスフォードという権威と伝統を誇る名門大学の文学の碩学という先入観は、見事に打ち壊される。彼の人柄も、書評も、肩書きから推測したイメージとは異なり、予想外の、またはオックスフォード大学の教授らしからぬ“unexpected professor”なのである。その肩すかしぶりが読んでいて面白いのだが、菌に衣着せぬ率直な書評は、読み手によっては反論を呼ぶだろう。

ケアリーによる書評に共通する点は、彼が「一般の読者 (general readers)」、「分別のある普通の読者 (sensible ordinary readers)」に向けて書いていることだ。難解でアカデミックな書評を嫌っている。彼には、分別のある一般の人々が大切なのだ。本を解釈、評価する根本的な基準となるのは、彼の生活者としての指針だ。ケアリーは、義務教育を終えただけの両親のもとに生まれる。父は布地会社の経理を担当し、職場の人達皆に好かれていた。そんな父を彼は誇りに思う。少年のケアリーは、ロンドンの選抜制の公立学校であるグラマー・スクールに進学し頭角を現す。そこで詩への嗜好に自ら気づき、運良く優れた文学やラテン語教師の薫陶を受け、見事オックスフォード大学の奨学生となる。しかし、多くのバブリック・スクール出身者のなかにあつて、当初オックスフォードに違和感を感じる。そこは、彼の慣れ親しんできた世界とは、あまりにかけ離れた世界であった。彼は十代から階級社会に意識的であったし、その後も一貫して人間としての平等を重んじる。一方、オックスフォード

ドは、階級社会の縮図のような世界であった。

主にジョン・ダンについて優れた研究成果をあげ、講師から教授へと順調にアカデミズムの道を進み、オックスフォードに根を下ろしていった。家族への想いは変わることなく、父を週末の買い物に連れていくのを習慣とし、そんな折りに父が母にと買った桃が、母への最後の贈り物になった逸話を紹介している。青果店の茶色の紙袋に入った桃は、いかにも父らしいと。その贈り物に象徴されるように飾り気がなく、優しい父、家庭が第一の母、障害をもつ兄を労る家族、大学で見初めた聡明な妻や、恵まれた二人の息子。人生の折々の出来事と家族や友人が紹介されるが、オックスフォード大学で出会う特異で奇行の持ち主の大学人とは対照的だ。大学街での暮らしも板に付き、愛好するディケンズの小説の登場人物と見紛うほどイデオシシンクラティックなそれらの教授連を、オックスフォードの歴史的建造物同様に、愉しめるようになっていた。

コッツウォルズに居を構え、ガーデニングに勤しみ、養蜂に夢中になる。皆が憧れるような、都会出身者の幸せなイギリスの田園生活。大学で、田園での家庭生活のなかで、ヨーロッパの休暇先で、彼は読み続け、それを愉しみ倦むことを知らない。彼にとり、これらの普通の (ordinary) きちんとした (decent) 暮らしと読書は、両者とも人間にとり不可欠な営みである。それに加えて、彼は「インテリジェンス」を重視する。シャーロット・ブロンテの方が、妹のエミリーより「鋭い批評的知性 (a sharp critical intelligence)」を持っていると評するとき、それはケアリー自身が英文学者としてのみならず、普通の読者及び生活者として、もつとも必要な資質と考えるものだろう。

オックスフォード大学というエリート集団に所属しながら、ケアリーはエリートを嫌い、階級差別に敏感で、広い意味での社会主義的な考えを擁護している。従って、ジョージ・オーウェルを、二十世紀のもつとも偉大な作家とみなすのも当然の成り行きである。とりわけ、オーウェルが “decency” という言葉を尊重したことに、彼は同感の意を表す。日本語訳が難しい言葉であるが、大江健三郎もオーウェルの思想を端的に示すその言葉に共感し、「ひかえめな態度で礼儀正しくあること」と解釈し、自身の小説のなかの登場人物に、そのように語らせている。ケアリーの回想録からは、彼のディーセントな生活ぶりが、確かに伝わってくる。その生活感覚からずれてしまう作品には辛辣であるが、批評は豊

かな教養とユーモアに裏打ちされ、暖かで率直な人柄が伝わってくる。人柄と生活と仕事の見事なハーモニーが、そこにはある。

## ウルフを読むために

ケアリー先生が著書のなかで、エリートとしてにべも無く切り捨てるイギリスの小説家ヴァージニア・ウルフの著書を全部読むのが目的で、私は仕事を辞め、大学院に入ることにした。後のことは何も決めていなかった。ウルフは知的な家庭に育つたにもかかわらず、女性であるという理由だけで、高等教育も受けられず生涯そのことを悔やんでいた。ケンブリッジ大学に学んだ兄や弟とは異なり、大学に進学できず、学生であった父親の蔵書を片っ端から読む人だった。読書によって独学し、新しいタイプの小説を創作し、同時に「普通の読者 (common reader)」として読んだ書物について、小説家ならではの感性豊かな評論を沢山書き残している。それらの著作だけでもかなりの数であったが、丁度その頃、六〇年代に始まったフェミニズムの第二波の隆盛に伴って、ウルフの作品の再評価が始まり、彼女の膨大な量の日記や書簡が次々と編集、刊行され始めた。そのために私の読書リストは、どんどん長くなっていった。一緒に入学した人達が大学院を去っていき、私は一人でウルフを読んでいった。しかし友人が働くべきだと私を論じ、職探しの方法まで教えてくれた。彼女の後押しで、非常勤の英語教師になったことは全く予期せぬ出来事で、この友人にはもちろんのこと、私のような者を教師として受け入れてくれた人々に感謝し、仕事に精を出した。しばらくして、専任の仕事に就くことになり、私こそが気づいてみたら、予想外の大学教授だった。

仕事をないがしろにしたことはないが、よい教師だったかという点には、学生には申し訳ないが、自信がない。世の中が新しい世紀を迎えると急速に慌ただしくなり、大学もその余波を被り、大学教員の仕事も年を追うごとに忙しくなった。大学院生の頃のように作家を決めて、その作品を集中的に読むということは、とでもできなくなってしまった。オーステイン、ブロンテ姉妹、ジョージ・エリオット、ディケンズ、ジェイムズなど、イギリスの小説はどれも大部で読むのに時間がかかる。それ

らの小説に並行して、外大に移る前の九〇年代の十年間近く、ドストエフスキーを同好の人々と読み続けられたことは、今では奇跡のようだ。格段と増えた仕事すべてに優先し、読書は後回しになった。原因は仕事だけではなかったが、読む本の数が年ごとに減っていった。

## 文学の賜物

大学生として文学部に進学したときから、この歳までずっと文学など何の役にも立たない、と言われ続けてきた気がする。日本の役人達も、人文系の学問を軽視している。教育を受けた人のなかにも、文学は絵空事と思っている人はいくらでもいる。職業を尋ねられると、いつも何と答えたらよいのだろうと戸惑ってきた。とりあえず、英語の教師と答えてきた。それでも、外国語大学の文学のゼミではあったが、どの文学ゼミも常に定員を超えて学生が集まったのは、不思議なことだった。最後の私のゼミでは、イギリスの伝説の王、アーサー王の物語を、十五世紀のトマス・マローリー版 (*The Death of King Arthur*) で読んだ。それはイギリスの現代作家アクトイドが、現代英語に訳出したものだった。学生たちは皆、学生時代のストーナーのように、トリスタンとイゾルデの愛に感動し、ランスロットのカッコいい騎士道振りに感嘆し、アーサー王や円卓の騎士の無惨な死に胸塞がれた。物語の背景をなすケルトの神話や伝承、イギリスの歴史やキリスト教などにも、ゼミ生たちは新鮮な関心を示し、大学四年生として頼もしかった。このイギリスの古い物語が、時空を超えて遠く離れた日本の現代の若者の心を打ったのは確かだった。この読書の経験が、彼らにとり何の役に立つのかはわからない。学生たちのこの「純粋な喜び」を、ケアリー先生は、文学の最上の賜物という。そして、彼はその著作のなかで、一度として文学の役割や効能を問うことはない。

ストーナー青年はリベラル・アーツの文学の授業を契機として、文学への愛に目覚め貧農の長男故の桎梏から解放された、結果として予期せぬ大学教師となった。読書から得る個人的な喜びが、その端緒を開いた。アメリカの格差社会で生きる者にとり、それは夢の成就に匹敵するだろう。しかしストーナーは、同じアメリカ中西部の貧しい農家出身のギャツ

ツビーとは対照的に、成功の夢を抱いたことすらなかった。読むことの喜びや習慣が、彼の人生を形成し、仕事から確かな手応えを得た。それは、人として紛れもなく幸福なことである。書物の主人公と自分を比較するのは面映いが、私もストーナーとケアリーの二人の教師のように、読むことが教える仕事に結びつき、その仕事が私を支えてくれたと今にして思う。しかしこの三十余年を振り返ると、教師の仕事は私にとつて最後まで試行錯誤の連続で、満足を感じることは稀であった。幸運なことに、行き詰まったときには、学生の偶然的言葉が私を支えてくれ、個人的で優秀な先生方との会話や援助が、乗り切る力を与えてくれた。外大の各部門の仕事に習熟した人々も、陰で支えてくれたに違いない。

昨年の年頭に退職のことを考え始めてから、もう一年以上が過ぎた。しかしそれは、いつもと同じような慌ただしい一年だった。二人の先生の本には、退職後のことは触れられていなかった。教員生活最後の一年が終わりに近づきつつある今も、どこかに到着した感覚はない。里程標のない旅は、この先どれくらい続くのだろう。新しい春が来たら、まずは重いコートを脱いで、やはり本を読むのだろう。ケアリー先生のユーモラスで、率直な、多方面にわたる本の紹介は、未知の世界への最適な道案内だ。仕事を終えて、何の予定もない贅沢な時間に、ゆったりと展開する大冊のイギリス小説を、先生のガイドで読むことが、今から愉しみだ。あとどれくらいそんな時間が残されているのだろうと、仕事人間は気短に自らに問うのであるが。

（二冊の本）

・ John Williams. *Somer: A Novel*. London: Vintage, 2012. (ジョン・ウィリアムズ「ストーナー」東江一紀訳、作品社、二〇一四年)

・ John Carey. *The Unexpected Professor: An Oxford Life in Books*. London: Faber, 2014. (『予想外の大学教授』)

(ふじい かよこ)